



# キリスト者として生きる

現代社会の座標軸をもとめて

第4回

森本あんり

もりもと あんり  
国際基督教大学教授

# ドグマこそドラマ

標題の「ドグマこそドラマ」は、実はこの春翻訳出版されたばかりの本（新教出版社刊）の題名です。著者はドロシー・セイヤーズ。先日偶然この訳書を手にして、とても驚きました。六〇年も前に書かれた小さな目立たない本で、実はひそかに愛読していた本なのです。まるで、自分の穴場にしていたお気に入りのお店が、突然テレビで大きく放映されてしまったような、嬉しいけれどちょっと複雑な気分です。

日本では推理小説作家として知られているセイヤーズですが、英国教会の信徒としてしばしば宗教評論を書きました。オックスフォード大学を卒業した最初の女子学生の一人で、そのわりにちつとも気取らず、才気に満ちていて、率直で、ときに相手が誰であろうと礼儀正しくもばつさり切って捨てる——実に怖くて魅力的な女性です。おそらく、「現代社会の座標軸をもとめて」というこのコラムには、彼女こそ打って付けの書き手ではないかと思えます。中村妙子さんの「訳者あとがき」によると、その文章は、神学者カール・バルトをも魅了して、彼にドイツ語への翻訳を思い立たせたほどだ、ということなのです。

さて、その本の冒頭で彼女はこんなことを言っています。近年（といっても戦前のイギリス）のキリスト教界には好ましくない論調がある。それは、「教会に人が集まらないのは、説教者たちが退屈な教理ばかり説いてい

るからだ」という人々の声である。——しかし、彼女の見るところ、事實はまったく反対なのです。教会は、教理を説いているからではなく、教理を説かないから退屈なのだ。教理にこそ「人間の想像力にショックをあたえる刺激的なドラマ」があるのに、そのことを抜きにして、耳に心地よい甘口のヒューマニズムを安売りしようとする。だから教会は退屈なのだ、と言うのです。

もちろん、ただ教理をそのまま語れば面白い、というわけではないでしょう。しかし、著者が実際に本の中で語ってみせているのを読むと、神、キリスト、人間、罪、といった教理の示唆することが、いかにわたしたちの日常生活と深く重なり合う彩り豊かな真実であるか、それがとてもよく響いてきます。こんな面白いドラマを差し置いて、いったい教会は何を語ればよいのでしょうか。

面白いばかりではありません。わたしたち

セイヤーズが実際に本の中で語ってみせているのを読むと、神、キリスト、人間、罪、

といった教理の示唆することが、

いかにわたしたちの日常生活と深く重なり合う

彩り豊かな真実であるか、それがとてもよく響いてきます。

こんな面白いドラマを差し置いて、

いったい教会は何を語ればよいのでしょうか。

はしばしば、大切なのは教理でなく倫理だ、

と言います。教理を論じ始めると対立が生まれるから、さしあたって神学論議は脇へ置いて、

まずどうしたらお互い愛をもって平和に生きられるかを考えよう、などと言います。

けれどもセイヤーズは、まさにそのような教理と倫理との分離こそが問題なのだ、と言うのです。

皮肉にも、この両者が切っても切れない関係にあることを示したのは、ヒットラーのドイツでありました。この本の原題となった

「教理か混沌か」という講演がなされたのは、対独戦争が始まってすぐ、一九四〇年のことです。著者は、ドイツとの戦争を「教理の違いに始まった宗教戦争だ」と言います。最近

の紛争を「宗教戦争」と呼ぶ人はあっても、

第二次大戦をそう呼んだ人は少ないでしょう。しかし彼女によれば、それはまさしく教理の違いからくる戦争なのです。

つまり、「世界の創造主なる神」を認めず、したがって「人間はみな等しく尊い被造物だ」という教理を否定する勢力との戦いです。

この教理を否定したナチズムは、当然その帰結である倫理をも否定しました。彼らの行為は、彼らが信ずる教理をそのまま実行したもののなのです。

ヨーロッパがあれよあれよという間にナチズムの侵略をゆるしてしまったのも、このつながりをよく理解していなかったからだ、と

著者は言います。「ドイツだって本当は、何が正しいか、よくわかっているに違いない、行動が伴わないだけのことだ」と思っていた

のです。誰でも、悪いことと知りつつやってしまう、ということがあるからです。イギリスのキリスト教だって、けっして誉められたものではない、ということも彼女はよく知っていました。

しかし、ナチズムはそれと異なり、みずからの教理に基づいた確信をもって、それに見合う蛮行を次々と重ねてゆきました。人々が教理と倫理とのつながりに敏感であったなら、もう少し早く手を打つことができたのかもしれない。

セイヤーズの文章は、ときにわたしたち自身の痛いところも突いてきます。全編を読み通して、著者がいつも自分の味方だ、と思える人は少ないでしょう。なかには、たとえば「異教徒」に対する態度のように、時代の限界を感じさせる発言もあります。このコラムでも、教理の信仰に関して、後に彼女とは正反対の考え方を紹介することになるでしょう。けれども、それら全部を割り引いても、この本から学ぶことはとても大きいと思います。時代も文化背景もまったく違う社会なのに、キリスト教に対する人々の疑念や疑問は、現代日本のわたしたちと驚くほど共通しているからです。

本当は内緒にしておきたかった本ですが、えいくそ、こうなった以上、ぜひ一読をおすすめします。